

虹の理論

Théorie de l'arc-en-ciel



Shin-ichi Nakazawa

中沢新一

新潮

にじ　　り　　ろん
虹　の　理　論

新潮文庫

な - 23 - 1



平成二年九月十五日 印刷
平成二年九月二十五日 発行

著　　者　　中　　沢　　新　　一
なか　　ざ　　しん　　いち

発　行　者　　佐　　藤　　亮　　一

発　行　所　　株式　　新　　潮　　社
会　社

郵便番号　一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話　業務部(〇三)二六六―五一
編集部(〇三)二六六―五四〇
振替東京四―八〇八番

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・株式会社光邦　製本・株式会社植木製本所
© Shin'ichi Nakazawa 1987　Printed in Japan

ISBN4-10-129011-3 C0195

新 潮 文 庫

虹 の 理 論

中 沢 新 一 著

新 潮 社 版

4543

目

次

I

虹の理論 11

虹の理論 2 43

人類学者の手記 45

作庭家の手記 103

タントリストの手記 145

II

ファルマコスの島 175

ファルマコスの島 2 205

エリアーデのために 237

ハッピー・エンド 265

あとがき 279

虹 の 理 論

超人は大地の意義なのだ。あなたがたの意志は声を発して、
こう言うべきだ。「超人こそ大地の意義であれ」と。

(ニーチェ『ツアラトウストラはこう言った』)

I

虹 の 理 論

親愛なるK・Aに

あなたが、オーストラリアをたつ直前に、私に送ってくれた絵はがきの写真は、とても美しいものでした。それに、その写真にうつっている景色は、私にとってひどくなつかしいものだったので、バンドンの町にもどったあなたへ、こうして手紙を書いている私の机の上に、いまでも大切に飾っております。

あなたも知つてのとおり、私はこれまで一度もオーストラリアを訪れたことはありません。ですから当然、そのただっぽい景色のなかに、じっさいにたたずんだことなどないのです。それなのに、あなたの送ってくれた絵はがきのあの写真、あの写真を見るたびに、私の意識の底のほうから、ある鮮明な記憶が細部のひだまでもくつきりと、浮かびあがってくるのです。じっさいに行つたこともないのに、私はその景色を、赤茶けたオーストラリアの砂漠^{さばく}の景色を、細部にいたるまでよく知っている……

一九八五年十二月二十五日

こんなことを書くと、私にはあなたが、あの皮肉たつぷりの微笑を浮べながら、「すると、君はずっと昔、前の生において、じつに一匹のカンガル―であつたとしても言うのですか」つて、おどけてくる様子が手にとるように見えてきます。でも、あなたは私のような人間にたいていしてもつねに寛容の心を忘れず、そのあとにこうつけ加えてくれるのを忘れない人のような気がします。「いいですか、あなたはまがりなりにも人類学者として、人から信用されていなくてはいけないのですから、自分は前生で一匹のカンガル―だったため、見たこともないオーストラリアの砂漠の景色をよく知っているなんて話を、論文に書いたり、人前でしゃべったりしてはぜつたいにいけないのです。そういう話は、私のためにだけとっておきなさい。で、あなたはそのときどんな格好をしたカンガル―だったのですか。私にはワラビーの一種だったような気がするのだけれど」つてね。じつを言うと、自分が前生でカンガル―だったのかどうかということも、ひどく気にかかることではあるのですが、あの絵はがきにうつっていた景色は、私の無意識の貯蔵庫のなかで、とても大きな位置をしめているように思えてならないのです。あなたは、私の思考にとつていつも、鉄床かなどこを打つハンマー、液体に投げ込まれる触媒、動物を巣穴の外に誘い出す狩人かりゆうどの罠わなのような働きをしています。今度も、一枚の絵はがきが、私の無意識の鉄床に、シャープな一撃を加え、そこからいろいろなものが飛び出してきそうな気配なのです。

十年ほど以前の一時期、私はほとんど毎晩のように、夢のなかに同じ光景が現われてきては消えていくという、奇妙な体験をしていたことがありました。夢のなかに、赤茶けた砂に

一面おおわれた、ほとんど植物の姿すら見えない、荒れ果てた砂漠の光景が現われてくるのです。つぎのシーンに移ると、今度はその砂漠のまんなかに、信じられないほど巨大な岩の山がそびえたつてきます。岩山はこんがりやけたカンパーニュ・パンのような格好をしています。巨大さや奇妙な形以上にびっくりさせるのは、その色彩なのです。朱と赤のちょうどあいだぐらいの、夕焼けの空の色とでも表現したら、いちばんぴったりくるかも知れませんが、しかもそのあざやかな赤の岩山は、いままさに砂漠に沈む夕日の光をあびて、燃えあがっていくようなのです。その光景が数秒間つづいたあと（なにしろ、夢のなかのことですから、それが数秒なのか、数十秒なのか、数分なのかは、はっきりしません）、今度はもつと驚くような光景がくりひろげられるのです。虹です。赤い巨岩が砂漠に接するあたりの岩窪から、大きな虹が立ちのぼってくるではありませんか。虹はずんずん伸び上がって、カーブを描いていきます。それは赤い巨岩の背たけほども伸びあがり、そこで大きなアーチとなる。その虹のアーチのいっぽうの足はもとの岩窪に降り立ち、そこから複雑な色彩でできた光の柱を噴出しつづけているのですが、もういっぽうの虹の足は、途中で空中に溶け入って、見えなくなってしまうている。そして、虹が大きなアーチを描ききるとまもなく、浮気な夢は、この目もさめるような砂漠の光景のことなどさっさと忘れて、もう何の関係もない別のシーンに移ってしまうのでした。

私にとって、夢のなかに出現しては消えていくこの砂漠の光景は、ほんとうに不思議な、謎のようなものでした。だって、私はそんな場所に行ったこともなければ、そういう光景を